現代文

で で X くことが 小、 間 人 世 間 元 箱 5 0 作 なら 根 tz 0 紀 人はなぜ苦しい 一番 、もしも は、 番 たとか、 p 為だとい ととし D 4 大事 日 う世 何 光 大事な、なくてはならぬ食物を作る小作人諸 17 諸君 ts 12 は、 暑さを うなら 冬の 食物 Ш 界 3 的で 不 血 はそれをうれしいと思うか。 を、 te 寒い時 幸 長 避け 五 男をドイ ば、 あ 0) る今 事 作ることに 反質入したとか カン tz 12 な そこに勘 日では、そん 3 老い その か。 " 17 それ ため 遊学させ、弟を大学に娘 たる親をつれて逗子や _ 忍の 生 懸 いうならば、 にことしは足ら は しようも な迷信 14 命 働 者 来る年も、来る年も貧乏して、足ら 0) 41 にただ 言う前 T あ i, る。 後の楽 まされ b な 君。 ぬとでもいうな 世 6 ZOS 鎌 カン L 諸君 を高 てお らの U 倉、沼 ら、くる年 \$ 7 夏 等 悪報 っては末には牛や は をあて 1) 女学校へ入れたの 暑い マァー、親先祖 津 40 で らば、 あろ もく にして、妻との 寝物語 葉 時 Ш 12 うか、 る年 と寒さ 病 そこに 8 \$ 3 足 2 馬のように L 0 を 妻子 で、 足らぬ 慰 昔 カン 6 厭 8 うて W2 カン 山林を 足 5 3 諧 引 ح ٤ 5 \$ な

なかろう。

ところが、

諸

君が

年

がら年

中足らぬ足ら

ねというの

は、

決してそんなぜ

いたくな

-17-

番上等の 足らぬ足らぬというのが や麦飯を食べて、そうして地主よりも 建築技術 ロボ 口で、家は 物を食べているかというに決してそうではない。 ねばならぬ。しか かし、それは少しも無理ではない は 。正月がきても、 進んだといっても、諸君の家には音さたがない。 獣 の果のようである。 小作 も諸君は悲しい 人諸 盆がきても、新し 君、諸君が一生涯 商人よりも多く働いて しかしなべら、食物は諸君が目分で作るのであ 0 ことに、その銭を 着物は呉服屋に い着物一枚 0 運命 であ 上 着るの いる。 持たな 銭を出 諸君 等の米は地主にとられ 3 ではな の家は五百年も千年 7 い。そこで諸君 さねはならぬ。家 れ 6 すら、 世は二十 来る て、 の着 年 \$ は \$ るか 大 物 目 来る は I 分 前 0 は 5 12 63 文 0 年 粟飯 つ 手 专 間 7

これ は、マ ア、どうした訳 であろうか。一口 に歌っ てみれば

べての 坊が 泥坊にとられ、 二がいる。 なぜにおまい 物に もうけやが 残らず政府とい 諸君はよく考えてみたまえ。年がら年 30 は貧乏する。訳を知らずばきか 残る半分で酒や醤油や塩や肥料を買うの そこで小作人諸 う大泥坊のため 君 U) よう に取られ 12 しょうか。天子、 H る税金がかかっ 分の土地というものを持たずて、 中汗水流して作った物で、 である。 ている。 金持、 が、 その 大 その上に、 地主。 酒にも、 人 半分は 0 正直に 肥料にも 商人と III 地主と 5

だり、 がれは たと して三年 金なし てん 25 ば て、 3 人を殺すか、 して何にもせずに一生を遊び T て な具合 れ 111 でも さな がら、 うちが いる そうしてうちに帰れば、夏 へ飛び T 0) は一生涯貧乏と離れる事 間、 いるうちに家に ではない 67 に小 込ん 地主や金持ちの 君と貧乏は離れることはできな 貧乏で金は云っ てゆきた 貧乏 小遺銭を送 自分が殺 で死んだり、又は 作人諸君をいじめるのだも 0 かる ts 47 かで育 自分 されるかという血なまぐさい つって、 いる親父は妻子を連れ と思うまも は桑 てくれ 家に生まれ T あげ、 ずはでき 聞きたくもない 送る の葉 んは涼 ず、 鉄道で死んだりした者が なく やれうれ 0) _ L 15 枚つみもせずに、 で 3 + 金がなければ古兵に 60 ある。 ならば、 所に暑さを のであ 67 0 て乞食に 0 一となれ しゃ、 人殺しのけ 諸君 これは全体なぜであ 諸 る。 = 君が 所へ引っ は これ まだそれ ばい のぎ、 朝は 知 四五までも三十までも学校 でだしたとい 5 絹の から田 60 15 一番 どれ P いじめられる てをさせら ぱりだされる。 冬は でも 着 67 ば であ 物に 鶏に ほどある 畑の一あぜも余分に カン 暖 何でも兵士にとら b 3 包まっ カン 3 起き夜は暗 う者もある。兵士にでたせ なら うか。 50 6) れる。 海 0) ので、 て、 岸に 大地 カン せがれが しれ 同じ それ 主や 首を括っ 家 < や外外 人間 を なるま ts で戦争 n 肉 金 11 作 が兵士に三 0 る。 持ちが T 国に遊ん 17 0) 2 生 T T 0 て死ん 12 て、 まれ そう ある 13 游

けれどもそれが諸君にはできないというのは、 昔より天子でも大名でもこの迷信をなくてはならない われのいう事を聞いて、 諸君が二 重なる大敵であるということを忘れてはならぬ。 して諸君は、 金持や大地 の博士より下は小学校の教師までを使って、 る事はできない。 る。それだから諸君の為には、 にしていたために、 して、そ 十歳の年令 を日光や箱根で遊ぶのに、一人で二千や三千の金を使うというでは また、これをあ 諸君にこの迷信を棄てられては自分たちが遊んでぜいたくをすることができなくなるから、 主のように の人たちは から 今すぐにでもその迷信を棄てさえすれば諸君は本当に安楽自由の人となるのです。 しからば、 ぜ 五十歳まで、 地主や金持のするようなぜいたくを夢にも見ることができないのである。 たくをしたいであろう。 兵士などにはでなくてもよいのである。 りがたく思っている。 小学校教師などが、 今の天子でも大臣でも昔の徳 休まず 諸君が一つの迷信を持っているからである。親先祖の昔からこの迷 食わずに働いても三千円と 諸君には迷信を棄てられない 明治の今日もそのとうり、 だから諸君は一生涯、 たまには遊んでうまい 、ありがたきものにして諸君を欺いてきたの 諸君や諸君の子供に教えてむ迷信というの 川も大名も、親先祖 小作人 う金はできな 物を食べたい や孫子の代まで貧乏と 政府は一生懸命で上は ようにしてい 諸君も の昔から恨み 諸君がわれ であ 去 円ですぞ る。そ っと今 ろう。 ts

君が昔からこのまちがっ が迷信であるかということを語っ というのは、 た考えを持っているのか、 まちがった考えを大事本尊に守ってい てみよう。 ということはあとにして、どういうまちが る事をいうのであ る。

△諸君は て税金をださねばならぬ。 政府が 地主から田や畑を作らせてもらうから、 あ ればこそわれわれ百姓は安心して仕事をしていることができる、 そのお礼として小作米をやらねば その なら お とし

貧乏しても小作米と税金と子供を兵士にだすことに反対することができなくなっている。も 種もまか く事も読む事もしないでしまう。 人をださなくてもよろしい、 者を兵士に出さねば てもよろしいかというに、 ず肥料もせずに、 国に軍 それは謀反人である、 備がなけれ ならぬ。 税金を納めなくてもよろしい、 放っておいてごらんなさい。 ことは一番よく考えて読んでいただきたい。しからば、なぜ小作米を地主 それは小作人諸君が耕す所の田や畑を、 国賊であるなどといってその実、 という三つのまちがった考えが深くしみ込んでいるから、 われ われ百姓 は外国人に殺され かわいい子供を兵士にださなくてもよろしい 秋がきたとて米一粒できません。 自分たちの安楽自由の為になることを、聞 てしまう。それだから若い丈夫な 春から秋まで鍬もいれず 夏になっ

ば 久しく 貧乏している。 きるように ても麦半粒とれるものではない。 てみたまえ。昔から泣く子と地頭には勝てぬとい ことはな 小作人諸君、 ば、 なって麦ができるのは、 なら 長い長い るではない 安楽ができてい do る。 奪われた物を回復する名誉の ねとい 自分が働いてできた米や麦は残らず百姓諸君のものである。 ぜで 地 したのである。その土地を耕し 恨み 諸君は長い問地主に盗まれてきたのであ 主の あ う理屈が なんて、 か。 3 の腹い 202 倉に こんな厄介ものを生かしておくために、 るか。 小作人諸 あるすべての物をとりだすことは、 あるか、土地は天然日然に せに年 バ 百姓諸君が カの 少しでもこれが政府様のありがたい所だということがあっ 貢をださぬばかりでなく、 頂上である。 君、 ててをみれ 難しい理屈 事業であ 一年中汁水流して、 てとった物を自分の物にするのが何で襲反人であ 諸君はこんなバ ばすぐに知れるでは る。次に、政府に税金を出きなく はいらぬ。 って、 as 2 たもの ったが、今という今、 無理な圧制をするの 地主の倉にある麦でも金でも取り返す権 休まずに働いたためである。そうしてみ 決して泥坊ではない 諸君は政府 カらしい政府に税金をだすことを 正直に働いて税金を出す小作人諸 æ, 13 何をね 67 れらの先祖 در<u>ر</u> ه とい うもの 13 ての かぶ けて地主へ半分ださ になって米ができ、 0 お上の てもよろ から 0) 諸君とわ 迷い 開墾し ある為 たなら、 がさめ 仕事 て食物の れらが、 にどれだ 60 とい てみ 君は まっ 111

天子の 少しもありが えば、さも神様ででもあるかのように思われるが、代々外は蛮夷に苦しめられ、 されて ことであ 正義を れた 成功したのである。 や強盗をし ありながら、天子の苦しむのは自業目得だから勝手であるが、 もちゃにせられてきたのである。 一日も早く厄 君 言うことも書くこともできないので、 重んずる人々は進んで万民が自 政府の いるような神の子でも何でもないのである。 なき目由国にするということが、 ろうかというと、 て同じ 一日一日と食うことにすら苦しんでいるのだから、日本は神国だなどといっても諸 たくない 財産を取り返して、 泥坊仲間の 介ものを滅ぼしてしまおうでは 神様でもないことは少し考えてみればすぐ知れる。二千五百年続きましたとい であろう。 今の政府の親玉たる天子というの ナガス こんなにわかりきっ みんなの共有にしようではな 明治になってもそのとおりで、 不ヒコなどを滅ばりた、い 由安楽の為に政府に反抗すべきである。今の政府を滅ぼ なぜ謀 虚八百で人をだまし、 人のすることでなく、正義を重んずる勇士のする ない 今の天子の先祖は九州のすみから出て、人殺 たことを大学の博士だの学士だのとい か。 そうして親先祖 は、諸君が はば熊坂長範や大江山 それがために正直に働いてい 内政に外交に天子は苦しみ か。 自らを欺いている。 これは諸君が当然の 小学校の教師などよりだま の昔より、 内は家来の の酒天童子の 無理 また、 権利 る小作 通しで 者にお 道に して

-23-

あろう。・ 教え込んでいる。 腰の大祝日には、 そらとぼけた 真似をして天子は神の子であるということを、 れてしまうに ものと信じていたであろう。なるほど昔も今もいざ戦争とな 忍強い諸君でも、諸君目身の奪われていたものを取り返すために命がけの運動をする気になるの えられるから、諸君はいつまでも貧乏と離れることはできないのである。ここまでとけばいか 教師なども、天子のありがたいことを説くには困っているが、段段うそが上手になって一年 小作人諸君。諸君は久しき迷信の為に、国に軍隊がなければ、 に決まっている。 そうして一生涯、神の面をかぶった泥坊の子孫のために働くべく、使うべく、教 けれどもこれは天子だの政府だのという大泥坊がいるからなのだ。 れば、軍隊のない 民百姓は生きておられない 諸若や諸若の子供に 国はある国に滅ぼさ C

そこで小作米を地主にださないようにし、税金と子供を兵士にやらないようにするには、政府とい 儀をするの う大泥坊をなくしてしまうのが一番早道であるということになる。 からば、 戦争は政府と政府とのけんかではないか。 つまり泥坊と泥坊が仲間げんかするために民百姓が難 なればかわいい であるから、この政府といっ泥坊をなくしてしまえば戦争というもの にして、この正義を実行するのか。 子供を兵士にださなくてもよろしいということは、すぐに知れるであろう。 方法は 60 3 61 ろあるが、先ず小作 はなくなる。戦争 人諸君として

行したまえ。諸若がこれを実行すれば、正義は友を増すものであるから、一村より一郡に及ぼし、 きるのである。 郡より一県にと遂に日本全国より全世界に及ぼして、ここに安楽自由 十人でも二十人でも連合して地主に小作米をださぬこと、政府に税金と兵士をださぬことを実 0 無政府 共 産 0 想国 から To

をせよ 何事も犠牲なくしてできるもの ではない。 われと思わん者は、 ての īΕ 養の 為に 60 0 から 4 0)

(ヲヮリ)

発行の趣旨

を与えられた。 共産の赤旗を掲げて、 7 小冊子は、 明 治四十 日本帝国の主権者に抗戦の宣告をなした為に同年八月二十 年 六月二十二日、 H 本帝 国 0 首府に於て、 わが 同 志の十余 九日、 名が

大 杉 栄

畑 勝 三 (寒村) 佐 藤

百 瀬 すすみ

彦

源治郎

大須賀

3

لح

宇都宮 卓 爾

森 岡 永 冶

山川均

小暮れい

徳 永 保之助

右諸氏が入獄記念の為に出版したのである。

ての ります。 小冊子は、 一年もしくは四年 の後出獄する同志の不在中、在京僅少の同志が心ばかりの伝

との小冊子を読んで、きたるべき革命は無政府共産主義の実現にあることを意得せられ

つ戦士の胆力を研究する福音であります。 目下入獄 中の同志に葉書にても封書にても送られたし
これは入獄諸氏に対する唯一の慰めで、か

人獄諸氏に送られる手紙は

出して下さい 東京市牛込市ケ谷東京監獄在監人何々々君と書き、そうして差出人の住所姓名を明らかにし

日本は、1中下在衛門の間及衛等の風のだしつなるからではある。

た、これを読んでも意得のできない人は果して現在の社会は正義の社会であるか、父われらの理想 は今の社会に満足するものかどうかを深く取調べてもらいたい。 され、ダイナマイトを投ずることも辞せぬという人は一人も多くに伝導してもらいたい。しかしま 命運動をあやまらない為に広くかつ深く伝導せねばならないから、 との小冊子は、 長き長き迷信の夢より諸君を呼びさまし、近き将来になさねばならぬ 無政府共産とい うことを意 得 われらの